
silver-soul

たいむぱーそん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

silver-soul

【Nコード】

N8337J

【作者名】

たいむぱーそん

【あらすじ】

銀時「なかなか上手く出来てんじゃねーか」
作者「だろ」

で金のことなんだけど…」

銀時「この次もまたよろしく頼むよ」

作者「いや

金のことなんだけど…」

銀時「じゃあな」

作者「いや金…」

〔源外の工場前〕

（ピカピカのバイクを見て）

銀時「おうおう キレイに

直ってるじゃねーか

ほとんど全壊してたのに

スゲーな オイ」

源外「あつたりめーよ

俺を誰だと思ってるんだ」

銀時「指名手配犯」

源外「お前は 人の傷口

ほじくって楽しいか？」

銀時「冗談だよーホラア

バイクの傷口を

ほじくってくれた

お礼にさア

俺もアンタの傷口を……」

源外「ほじらんでええわい！」

銀時「いやいや アリガトよ

じーさん さすが

江戸一番のからくり技師

平賀源外だ」

源外「わかりやいいんだよ

で 金のこと

なんだがな」銀時「またなんかあったら

よろしくな」

源外「いや 金のこと

なんだがな」

ブウウン（走り去る）

銀時「じゃーな」

源外「いや 金……」

ピツ（スイッチを押す）

ガポン（後輪が外れる）

銀時「ん

うごおおおお！！

ズガガガガ（引きずる音）

ジジー てめっ

細工してやがったな！

源外「フン……金の切れ目が

縁の切れ目だ あばよ」

ズガガガガガ（引きずる音）

銀時「おわわわわ！！」

（十字路でバイクが飛び出してくる）

銀時・バイク（女）「！！」

銀時「うわアアアアア！！」

ガラガラガシヤン（ぶつかる）

源外「！！」

銀時「いでで」

源外「オイいいい！！

大丈夫かア！？ オメー

一般人に迷惑かける

奴があるかア！！

パン（銀時を叩く）

銀時「アンタが 車輪に

細工なんかしなきゃ

こんな事には
ならなかったんだよ
クソジジー!!!」

源外「おい 大丈夫か!？」

銀時「しっかりしろ

ネーちゃん オイ!!!」

ムクツ（血だらけで起きあがる）

のり子「大丈夫です

ちよつと転んだ

だけなんで・・・」

銀時「大丈夫ですって

血だらけだぞオイ

動くな!」

のり子「いやホント大丈夫です

（とれたハンドルを持って）

私 ホントちよつと

いかなきゃダメなんで」

源外「どこへ!？」

無理!無理無理無理!

違う所いっちまうぞ!!!」

のり子「!!! うごっ...苦し」

ガクツ（崩れる）

源外「オイ!!!」

しっかりしろ!」

のり子「バ・・・バイクを

早く 私をバイクに

私...走り続けないと...

風を感じないと...

死んじゃうん・・・」

ドサツ（倒れる）

銀時・源外「……」
「……なんだコイツ？」

〔源外の工場〕

源外「魔破のり子

快速星出身

職業 飛脚か……

：噂にやきいたことが

あつたがこんな厄介な

種族がホントに

いたとはなア」ザツザツザツザツ

（銀時が工場を走っている）

のり子「そんな言い方

やめてください

私達は風の精霊とも

呼ばれる由緒正しき

風の民なんです

いつも 風をまとつて

いないと身を保てない

繊細な もうほとんど

妖精みたいな

可憐な種族なんです」

銀時「いやいや そーいう

ロマンチックな話は

もう いいからよ

要するに何？

いつつも走ってないと

ダメってこと？

常に泳いでねーと

死んじまうサメみたいな
連中ってこと？」

ザッザッザッザッ

(のり子をおぶっている)

のり子「いえ バイクとか

風をあびられる

乗り物に乗って

いればなんとか

∴自分の足で走るのは

∴あの ダルいんで」

銀時「じゃあ 自分で走れや！

なんで俺が

バイク役やんなきゃ

いけねーの!？」

のり子「くっ 苦しい

スイマセンもうちょっと

スピードを・・・」

銀時「誰が一番苦しいと

思ってたんだ!！」

源外「手負いの女を

走らせる訳にも

いかねーだろ

しばらく足になってやれ

もうちょっとで

バイクも直るからよ」銀時「てめーはガチャガチャ

やってるだけだから

いいけどよオ」

のり子「ごめんなさい

ご迷惑おかけして

あ・・・

私なにもできないから

『サライ』歌います!」

銀時「24時間走れつてか!?!」

のり子「あのオ・・・」

そのオンボロバイクは

後にして先に私の

バイクを直して

くれませんか

私 仕事が・・・」

銀時「オイ

オンボロバイクって

なんだよ」

源外「オメーのバイクは

大破しちまって

直すのに時間がかかる

代わりにコイツのに

乗ってけ」

銀時「オイ 代わりにって

なんだよ それ

俺のなんですけど」

源外「だが オメー

その怪我で

バイクになんて

乗れるのかイ?」

のり子「乗れます

郵便受けの向こうで

私を待つてくれる人達が

いるんです それに

私 実はこれが地球での

初仕事なんです

こんな私じゃ

まともに働ける所が
なくて あちこちの
星を回ってきて

もう 私には

ここしかないんです

失敗なんか

できないんです

負けられない

私 絶対

負けられないんです

宇宙一の飛脚になるって

もう心に決め たんです

下ろしてください！

私は こんな所で

モタモタしてる

暇ないんです!!」

銀時「オメーが

おぶつてくれって

言っただんだろーが」

のり子「あなた達みたいなの

暇人につきあってる

暇なんてないんです！

早く下ろしてって

言ってん・・・

(下ろされる)

うがアアアア!!」

〔道路〕

ブ
ブ
ブ
ブ
ブ
ブ

(バイクのエンジン音)

のり子「すみません

仕事の手伝いまで

させる事に

なっちゃって」

銀時「もう いいよ

元はといえば

俺の責任だしな

で どっから回りゃ

いいんだ？ パツパツと

回って さつさと

終わらせようぜ」

のり子「ああああああ

風が気持ちいいイイイ!!」

(バイクの上で立ち上がる)

銀時「……オイ

きいてんのか？」

のり子「止めてみるオオ!

誰か私を止め

られるものなら

止めてみるオオ!!」

ガッ(木にぶつかる)

ドツシヤ(バイクから落ちる)

銀時「何してんだアア

お前エエエ!!」

のり子「うがアアアア!!

苦しいイイ!!」

銀時「バカだろ

お前バカだろ!

早く乗れ こっちだ!

(信号が赤になる)

あ

のり子「ギヤアアアアア!!」

止まらないで!

止まらないで!!」

銀時「これは無理だ

しばらく我慢しろ

スグだから」

のり子「スグだからって・・・

ぐはア!!もっ・・・

もうダメエエ!!

我慢できません!!」

グッ(アクセルを握る)

銀時「あっ

バカ お前エエ!!

ちよっ あぶっ・・・」

パー(クラクション)

二人「!!」

銀時「ギヤアアアア!!」

ドパ(トラックの荷台を横切る)

のり子「キヤアアア

坂田さん

スゴイですウ!!

風!!私たち

風になつてます!!」

銀時「ちよっ ダメ もう

タンマ!一旦タンマ!

下りるわ!俺もう

下ります!!認識が

甘かった!!」

のり子「何言つてんですか!!

まだ一軒も配達してない
じゃないですかア!!」

銀時「一軒も 配達して
ないのに既に
こんな目に
遭ってるから
言ってるんだろーが!!」

大体 止まることも
できねーのにどうやって
荷物届けるつも・・・」

のり子「よいしょ」

(荷物を持ち上げる)

銀時「!!」

ブン(荷物を投げる)

ガシャアアン(窓が割れる)

住民A「うわアアアア!!」

住民B「きゃああああ!!」

のり子「一軒目終了」

次はと・・・」

銀時「これは郵便配達と
いうんですか?
テロというんじゃない
んですか?」

全蔵「おっせーな飛脚・・・
確かに 今日届く
はずなんだが
ジャンプ応募者

全員サービス

大江戸戦隊ギンタマン

フィギュアセット

アレ どうせ

スグ打ち切りになるから

今のうちに手に入れ

ないと二度と・・・

フオオン

(バイクが一瞬で通り過ぎる)

！？ アレ？ なんだ

このガラクタ・・・」

ブロロロロ(バイク)

銀時「・・・どーだ？

一通りさばいた

んじゃねーか」

のり子「スゴイです！

残すところ

あと一つですよ」

銀時「・・・我ながら

よくやったもんだよ」

ファンファン(パトカー)

警官「その暴走車

止まりなさい！！」

銀時「うるせエエエ！

止まれるもんなら

とっくに止まって

んだよオ！！」

のり子「私達は風に

なるんです！

邪魔しないで下さい！！」

沖田「アリ？」

旦那じゃねーかい

何やってんでイ？

デートかい？」

銀時「オメーか

オイ ちよつと

まいつてんだ助け・・・」

沖田「オイ 俺の

なじみだ 退くぜイ」

銀時「ちよつ 待て！

助けてつて！！」

沖田「あつ 旦那ア

飛脚デートも

結構ですけどね

気をつけてくだせエ

最近 攘夷浪士の間で

何も知らない飛脚を

使つて大使館とかを

狙う爆弾テロが流行つて

ましてねエ 旦那も

気をつけてくだせーや」

銀時「・・・のり子ちゃん

その最後の届け物つて

宛先は・・・」

のり子「大使館ですね」

銀時「・・・なんか

変な音とかする？」

修理してんだア！！」

源外「 銀の字

こちら源外だ

応答願います」

銀時「無線だ」

源外「調子おかしーな

そっちの声は

きこえんから一方的に

しゃべるぞ」

銀時「あのジジー

こんなもんつける

暇があつたらブレーキ

ちゃんと直しとけや」

源外「お前に一つ忠告する

のを忘れていた

無線なんかつけてる

暇があるならブレーキを

ちゃんと直しとけば

よかった 以上！」

銀時「ただの懺悔じゃねーか！！

何くだらねーことに

無線使つてんの！！」

源外「お前のことだから

既にブレーキは亡き者

になっっていると思う

そんな時は下の方に

赤いボタンがあるのが

見えるか？ そいつは

緊急用のからくり機動

スイッチだ 押すと

ピッ（ボタンを押す）

ガゴッ（タイヤが外れる）

ダウン（ロケットブースターで空を飛ぶ）

空を飛ぶことができる」

二人「！！」

源外「銀の字

お前のことだ 人の話を

最後まで聞かないで

ボタンを押しちまう

こともあるかもしれねえ

けど そいつはエラク

エネルギーを使う機械だ

オメーのバイクじゃ

長時間飛行を続けるのは

恐らく無理だ

多分 1分位で

爆発するから」

銀時・のり子「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ドゴォン（爆発）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8337j/>

silver-soul

2010年10月21日20時35分発行